

IPM実践指標モデル（ガーベラ）

分類	管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄			
				昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況	
予防	ほ場内、周辺の除草（必）	病害虫の発生源となるほ場内やほ場周辺の雑草を除去する。	1				
	健全苗の定植（必）	定植苗は病害虫の発生加害のない健全な苗を使用する。	1				
	施肥管理	土壌診断または養液診断を行い、適切な施肥を行う。	1				
	施設内の湿度管理	灰色かび病や株枯病等の発生を予防するため、施設内や株元が過湿にならないように管理する。	1				
判断	気象情報の把握	気象情報を把握し、防除の要否を判断する。また、適期防除に心掛ける。	1				
	病害虫の観察	ほ場には必ずルーベを持参し、病害虫や天敵の発生状況を確認し、防除に活かす。	2				
	トラップの設置	黄色粘着トラップ等によりほ場での害虫の発生動態を確認する。	1				
防除	発病株・残さの処理（必）	半身萎凋病、えそ輪紋病の発病株を見つけ次第速やかに抜き取ってほ場外に出し、適切に処分する。また、灰色かび病が発病した花や葉も見つけ次第、同様に早期に処分する。	1				
	葉かき	ハダニ類や灰色かび病の発生防止のため、葉かきを適切に行い、欠いた葉はほ場外で処分する。	1				
	生物的防除	害虫	ハダニ類：天敵農薬（ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ）を使用する。	1			
		害虫	アザミウマ類：天敵農薬（スワルスキーカブリダニ）を使用する。	1			
	物理的防除	病害	灰色かび病、うどんこ病：生物農薬（パテルス スズテルス剤）を使用する。	1			
		防虫ネットの設置（必）	施設開口部は、防虫ネットで被覆し、害虫の飛来や産卵を防ぐ。注1	2			
	化学的防除	土壤病害・センチュウ対策	太陽熱消毒、熱水土壤消毒、散水蒸気消毒などを行う。	1			
		農薬の使用全般（共通）（必）	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する（薬剤散布後の残液が出ないように薬液を調整する）。	1			
		粒剤の利用	コナジラミ類、マメハモグリバエ、アブラムシ類に対し、定植時に粒剤を施用する。注2	1			
		ローテーション防除	農薬を使用する場合には、農業工業会が提供している作用機作による農薬の分類（IRAC、FRAC）を確認し、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で薬剤抵抗性が確認されている農薬は使用しない。	1			
		薬剤の選択	天敵農薬（カブリダニ類）に影響の少ない薬剤を選択する。	1			
			土着天敵（寄生蜂）に影響の少ない薬剤を選択する。	1			
散布後の処理	散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し河川などに流入しないようにする。	1					
その他	作業日誌（必）	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMIに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1				
	研修会等への参加	県や農業協同組合が開催するIPM研修会や防除研修会等に参加する。また、研修会等の内容は、家族や作業者等へ周知し、情報共有する。	1				
			合計点数				
			評価結果				

\*（必）と記述している管理項目については、必ず管理項目として設定しチェックする。

注1 コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類には1mm以下の目合い、ハスモンヨトウ、オオタバコガには5mm以下の目合いの防虫ネットが有効である。

光反射ネットも侵入防止効果がある。施設側面だけでなく、天窓にもネット等を展張すると侵入防止効果が高まると考えるが、高温多湿にならないように栽培管理に注意する。

注2 粒剤は長期間天敵農薬に影響する場合もあるため、影響期間の短い薬剤を選定する。